

ソウルにおける「安全マップ」の実践

前ソウル日本人学校 教諭

大阪教育大学附属池田小学校 教諭 孕 石 泰 孝

キーワード：安全マップ，安全教育，総合的な学習

1. はじめに

私は、今回の派遣で初めて「韓国」へ行くことになった。韓国は「近くて遠い国」と言われることがあるが、それはまさに私にあてはまることであった。隣国でありながら、中学・高校の歴史で学習したほどの知識しかなく、ソウルについても韓国の首都であるというほどの知識しかなかった。

韓国という、やはり過去の歴史問題が気になり、赴任前は少し構えたところがあった。しかし、韓国では、日本人学校の現地職員、交流校先の教職員の方はもちろん、住まいの近所の方、街で出会う人みながとても親切であった。ニュースでは、時に反日的な内容を話す韓国の方のインタビューなどが出てくることがあり、日本にもそうした報道が出ることもある。実際、そうした歴史的な感情は今も残っているのは事実ではある。しかし、自身が日常生活を送る中では「日本人だから」と、そうした感情をぶつけられることはなく、好意的に関わってくれる人ばかりであったのは本当にありがたいことであった。

さて、韓国のソウルは、国の人口の約四分の一が集中している大都市である。首都であるということもあり、日本人をはじめ、外国人も非常に多い。ところが、これだけの人口を抱える街でありながら、ソウルの治安はよい。体感的にも日本と同じか、それ以上と感ぜられるほどである。

しかし、そうした韓国ソウルではあっても、犯罪がないわけではない。日本のように、子どもだけでも歩けるほどの街だからこそ、却って子ども達には「自分の身は自分で守る」という意識とともに、危険回避力が必要である。また、日本人学校の子どものほとんどは、やがて日本に帰国する。日本での生活のためにも、帰国後のことを考え、韓国ソウルでも、そうした意識や危険回避力を身につけさせることは、意味のあることである。

そこで、日本で勤務していた時にも取り組んでいた安全教育の一つである「安全マップ」の授業をソウルで実践し、海外での「安全マップ」授業の可能性を探ってみたいと考えた。なお、本実践にあたっては、2009年度海外子女教育財団の教育活動等援助を受けた。

2. 「安全マップ」とは

「(地域)安全マップ」とは、欧米の犯罪社会学の研究成果である「犯罪機会論」に基づく見方を、立正大学の小宮教授が学校の実践現場に取り入れた安全教育プログラムである。小宮は、事前学習で、安全な場所を「(犯罪者が)入りにくく、(周りから)見えやすい場所」、危険な場所を「(犯罪者が)入りやすく、(周りからは)見えにくい場所」として教えた後、フィールドワークに出て実際にそうした場所を子どもらに発見させるようにしている。そしてその後、子ども達にフィールドワークで見つけた「安全な場所」「危険な場所」を「地域安全マップ」とよばれる地図にまとめさせている。これが「(地域)安全マップ」実践のおおよその概略である。

本実践では、じっくりと取り組むことができたため、子どもの考えをじっくり出し合わせ、指導者とのやりとりも細かに行ってはいるが、実践の大きな流れは小宮の実践に沿ったものである。

小宮の安全マップの授業の基本的な考え方やその実践については、『犯罪は「この場所」で起こる、(光文社新書、2005)』『犯人目線に立て！—危険予測のノウハウ (PHP 研究所、2007)』等の著書に詳しく述べられている。また、

「地域安全マップ作成マニュアル（東京法令出版，2006）」という小冊子も作成されているので，安全マップ実践にあたってはそちらを一読されることをお勧めする。

3. 実践の概要

本実践は，2009年9月～11月に小学部3年生の40名を対象に行ったものである。

準備したものは，撮影用のデジタルカメラ，全体に説明するための拡声器，インタビュー用のICレコーダー，学校周辺の地図，模造紙，マジック，折り紙，探検バインダーである。

(1) 「不審者とはどのような人か？」（1時間）

「不審者」のイメージを出し合い，そうした様子の人が必ずしも不審者ではないことを学ぶ。その上で，不審者は容易に識別できるものでなく，「人」に注目しても犯罪は防げないことに気付かせる。

(2) 「この場所は，どっちが危険？」（2時間）

次のそれぞれの場合について，「どちらが安全か，危険か」を，根拠をもとに考えさせる。その上で，危険な場所を「入りやすく，見えにくい場所」としておさえる。

○ 道を歩く場合（アンダーラインが安全な方）

- ① ガードレールのある歩道とない歩道
- ② 高い塀の近くの道と低い塀の近くの道
- ③ 街灯のある道と無い道

○ 公園で遊ぶ場合

- ① 囲いのある公園とない公園
- ② フェンスで囲まれた公園とブロック塀で囲まれた公園
- ③ フェンスの周りに駐車した車のある公園とない公園
- ④ マンションの窓側に面している公園と妻側に面している公園
- ⑤ ゴミが落ちていて落書きのある公園ときれいな公園



(3) 「その目で安全・危険なところを見てみよう」（4時間）

事前学習で学んだ「入りやすく，見えにくい場所＝危険」「入りにくく，見えやすい場所＝安全」という見方で，まちの様子を調べるフィールドワークに出かける。フィールドワークにあたっては以下の点について指導する。

- ① 役割分担（班長，副班長，地図係，カメラ係）の決定
- ② カメラの使い方（全体像が分かるように広角に撮る）
- ③ 調査範囲と帰校時間，休憩時の注意の確認
- ④ 「入りやすく見えにくい」場所が危険であり，「入りにくく見えやすい」場所が安全であるという見方でフィールドワークする。

(4) 安全マップを作ろう（5時間）

グループごとに模造紙大の安全マップを作成する。その際，以下の点について特に注意する。

① コメントについて

写真の場所が，なぜ危険か（安全か）について，「入りやすく見えにくい（入りにくく見えやすい）」という点からのみ記述させる。交通安全，生活安全に関わるものについては，「安全・危険」の視点がぶれてしまうため，この安全マップでは取り上げない。

② 道，方角，距離

あくまでもコメント（安全，危険の見方）が大切なので，これらにつ



いては細かなことは気にさせない。

③ 作業分担について

効率的に行えるよう、模造紙に直接書き込むことは減らし、折り紙を利用して個々が作成したことを貼付けることで作成していくようにする。

(5) 安全マップを振り返ろう（3時間）

発表内容は大きく2点ある。一つは「その場所がなぜ危険（安全）か」の説明、もう一つは安全マップ作成の感想である。ここでも、発表する場所については「防犯安全」に関わる「安全、危険」な場所であることを再確認する。また、発表の仕方については、ずっとメモを見るのではなく相手を見て話す、大きな声で話す、姿勢よく話すなど一般的な説明の仕方についても指導するようにする。

全てのグループの発表を聞いた後、振り返りシートを記入し、学習のまとめとする。

4. 実践を終えて

(1) フィールドワークに関しての成果と課題

ソウルは車社会であり、通行量が多い。子どもも保護者からは交通安全についてはよく話を聞いている。しかし、ソウルの治安は比較的良好で、防犯について話を聞くことは少ないようであった。そのため、まちを「防犯安全」という点から見るとという経験は児童にはなかった。

学校周辺をフィールドとしたので、自分の家の周りではないという子どももいたが、それでも約2時間半をかけて「ここは安全か危険か」と考えながら歩くことは安全・危険への意識を高める活動になった。また、事前学習で学んだ「入りやすく、見えにくい場所が危険」という見方で実際のまちをみることは、その見方を、実感を伴う理解へと高めることとなった。

一方で、実際の場所を「入りやすく見えにくい場所か」「入りにくく、見えやすい場所か」という点から判断しようとしても、判断が難しい場所もあった。例えば子ども達が調査した場所で細い路地があった。通路側から見るとたしかに狭く、見えにくいとその通路には多くの店の出入り口があり、店の人からは見えやすい。大人でもなかなか判断に迷ってしまうようなところである。そこで子ども達にも「こういう点から考えると危険といえるし、別のこの点から考えると安全といえるね」という指導をした。

このような場所は、「入りやすく見えにくい場所は危険である」という見方を身につけさせるには不適當な場所ではある。しかし、現実にはそうそう単純な見方でみられないということを知ることができるのは、フィールドワークに実際に出かけたからこそである。

さて、安全マップの授業を日本で実施する場合はインタビューを意識して行わせる。そのことで、子どもの地域への帰属意識、愛着をもたせたり、また、地域住民も子ども達に関心をもってもらったりすることが期待できるからである。しかし、ほとんどの子どもは韓国語でコミュニケーションが十分にとれるほど韓国語が話せないのが現状である。そのためインタビューをさせることは難しく、日本での実践のようにインタビュー活動を充実させることはできていない。これは海外で安全マップを行う際に一つの大きな課題となるが、これを充実させるには今のところ、現地教員や現地で長く滞在している保護者をボランティアの数を十分に確保しながら行うより仕方がないと考えている。

(2) 安全マップ作成における成果と課題

フィールドワーク後の安全マップ作成には、特に「コメントの記述」に力を注いだ。事前学習、フィールドワークを経てもなお、児童の「安全、危険」への気付きは「交通安全」や「生活安全」に関わることが出てくる。これは、日々の児童の「安全、危険」意識は「交通安全、生活安全」に向いており、「防犯安全」へ意識を向けさせるためには、安全マップのような活動を意図的に行わなければならないことを支持するものであるともいえる。

さて、このように、日常的に感覚として意識している「交通安全」「生活安全」と今回学習している「防犯安全」と、様々な「安全、危険」の見方を混在させたままでは、学習の焦点がぼやけてしまう。この「安全マップ」はあくまでも防犯教育を目的としたものであるであり、視点を「防犯安全」に特化させることが重要である。

そこで、「交通安全」「生活安全」のようなコメントを書いている場合は指導し、「防犯」からの観点で見てコメントを修正させるようにした。先ほどの述べた通り、「防犯」への意識の低い児童には、この指導は時間のかかるものであった。しかし、この作業を充実させることによって、「防犯の視点」に強く意識を向けさせることができた。

さて、この安全マップ作りの目的は、あくまでも犯罪機会論に基づく「安全、危険な場所の見方」を高めることである。したがって、地図上の方角や距離などを正確に記述することは必要ない。しかし、実践した3年生では、方角や距離の正確さを思いのほか気にしていた。そこで、事前にそのことを話してはいてもグループ活動中の指導において、その部分はそれほど気にすることはないと度々声かけすることが必要だった。

子ども達にとって、写真や折り紙等を様々な形に切ったり、絵を描いたりするマップ作りの活動はとても楽しいものである。5時間かけて、6人ほどで模造紙1枚を作成したが、グループで取り組むには適度な広さであり、それぞれに役割があって集中して取り組んでいた。

(3) 安全マップの発表・まとめにおける成果と課題

安全マップの発表では「その場所がどうして危険（安全）か」を「入りやすい（入りにくい）」「見えにくい（見えやすい）」という点から説明させることが最も大切である。それを考えても、安全マップの作成時の「コメント作成」は重視されるべき点であると言える。

さて、コメントについてはマップ作りの段階で指導し、しっかりと書いていたので発表の練習の段階では、内容については簡単に確認するだけでよかった。発表で言うべきことは、作成されたマップのコメントに記載されてもそのものだからである。ただし、発表の終わりの一言ずつの感想についてはこの場で改めて考えさせるようにした。感想の発表は短いものではあったが、それを聞くことで子どもたちのこの授業をどのように受け止めたのか、子どもの意識を把握することができた。

最後の振り返りのまとめシートでは、「まちはとても危険なものだ」という考えが多く出てきてしまっていたのは残念であった。フィールドワークによって危険な場所を見つけることは、普段そのように見ていないことから予想されることではあった。そこで、事後学習において、「ソウルは人も多く、たくさん場所で人の目があり、実際不安を感じるほどの場所ではない」と安心感をもたせるような話をしたが、やはり印象としては「危険な場所」の方が強く残ってしまうようである。この点については引き続き、安心感をもって学習を終えるための方法について検討したい。

(4) その他（保護者ボランティアの効用）

当日は、児童の安全確保のために保護者ボランティアを募って協力してもらった。

保護者との事前打ち合わせの中で、簡単に「安全な場所、危険な場所」について説明していたおかげで、当日、護者から有意義なアドバイスももらっていたグループがあった。日本では「子ども110番」といういざという時に子どもがかけこめるボランティアのような店、家があるが、韓国においてもそれがあるということを保護者から教えてもらっていたのである。



この「韓国版子ども110番」ともいえるシステムがあるということは、指導者は事前に話をしていなかった。プリントを事前に読んで理解していた保護者が見つけて、子どもにアドバイスしてくれたのである。また、参加人数は決して多くはなかったが、今回付き添ってくれた保護者は、単に児童の安全確保のための付き添いということに留まらず、安全への意識を高めることにもつながった。